

良寛の長歌「月の兎」

金 沢 篤

師神氣内ニ充テ秀発ス。其形容神仙ノ如シ。長大ニシテ清耀、隆準ニシテ鳳眼、温良ニシテ嚴正、一点香火ノ気ナシ。余牆高クシテ宮室ノ美ヲミル事ナシ。今其形状ヲ追想スルニ[〔]当、今似タル人ヲ不見。鵬齋曰、喜撰以後此人ナシト[〕]

はじめに 良寛への道

『月下の一群』の詩人、堀口大學の色紙が手許にある。

「良寛さま／古ころはまどか／月の輪と／姿は淡し／けむりかと／大學」が作者、堀口大學のことだから、「こころはまどか／月の輪と／姿は淡し／けむりかと」が、詩そのものというこゝである。松本和男〔1969〕には、「良寛さま／こころは円か／月の輪と／すがたは淡し／けむりかと」（六八頁）と収録されている。生前堀口大學の信頼の厚かつた松本和男氏による同書巻末の「マジナリア」には、この詩「良

した作品がそも、いかばかり、のこされたか。むしろ、そうした類のものを捜し出す困難をかこつのがオチであろう。つまり、先生は良寛をそのこ心中深く、しつかり抱きしめて生きた、真の思慕者だったのである。」(伊丹 1961 二〇二—二〇三頁)

伊丹氏の論点は明確である。だが、堀口大學が良寛についてほとんど書き残さなかったことをもって、他のいかがわしい？良寛ファンと一線を画しているというのはいかがなものか。かく言う伊丹氏の場合はどうか？ 先にも触れたように伊丹氏自身は、良寛について二冊も立派な御本をお書きである。これを何とする。堀口大學が良寛の書をこよなく愛した。そして、それを自分の生活において日々愛でていたということである。良寛についてほとんど書き残していないということであるが、結局、堀口大學の良寛への思いは、冒頭に紹介した一篇の詩に尽きているのではないか。良寛の書は自分の胸を打つ、そして良寛の書き残したものを通じては、良寛は「その心は、満月のように、円かであるようだ。だが、その姿を明確に浮彫しようとすると、あたかも煙のように、はつきりせずにとらえどころがない。したがってこれ以上、書きようがない。」ということである。書は言うまでもなく人間的にも大層立派であるように思われるが、正体はよくわからない、堀口大學は良寛に対しては、そのように言っているのではないか。

良寛熱が何時の頃からか大流行である。周知の通り、良寛とは、江戸時代末期に生きた仏教僧であり、歌人であり、詩人であり、書人である。本攷は万葉集に連なる歌人としての良寛の最高傑作とも言われることがある長歌「月の兎」を通して良寛の方へ到らんとするわたしのささやかな試みである。

一 相馬御風と良寛の長歌「月の兎」

わたしは伊丹末雄氏によつて良寛に誘われたと言つても過言ではない。伊丹氏の熏習⁹のせいもあつてか、わたし自身は、近代における良寛熱の鼓吹者のひとり、高校の先輩でもあり、郷土の大先達でもある相馬御風に対してはいわば負の思いを自分勝手に育んで来たような気がする。相馬〔936〕所収の「月の兎」と題された以下のエッセイなどを読むと、御風の「良寛の「月の兎」 鼻肩¹⁰ふりにもやや懷疑的にならざるを得ない。

「月の中の黒い陰を兎と見立てた最初の人はどのいかなる人であつたらう。今日では誰にでもさういふやうに見えることになつてゐるけれども、いつの時代かにさうと見定めた第一人者があつたに相違ない。おそらくそれまでにだつて、如何に多くの人が如何にさまざまな想像をあの月の中の黒い陰に向つて投げたことかわからない。しかも、誰のよりも、それを兎と見た人の想像がまさつてゐたと見えて、いつとなしにそれが萬人の承認するところとなつた。

それにしても、人々はなぜもつと／＼さまざまにあの月面の黒影に形を與へて見ないのだらう。自分がそれを試みないばかりでなく、なぜ人々は幼い者共にまでも自由な想像の代りに昔ながらの型を與へようとしてゐるのであらう。」（五八―五九頁）

この相馬〔936〕の緒言は「昭和六年「一九三二年…筆者註」の十一月下旬から十二月初めにかけて良寛遺跡巡りの小旅行をしてからこのかた、私はまだ一度も汽車に乗つたことがない。」から始まるし、同書所収の諸隨筆にも良寛の名前はしばしば登場するものの、良寛の長歌「月の兎」については触れられていない。したがつて、奇しくも「月の兎」と題されたこの隨筆で御風が何を言いたかつたのかまったく不明であるが、「現在、日本に於ては、月に餅や不死の菓の様なものを白で搗いてゐる兎の姿を眺めてゐる。然し、月の斑点のこの説明は、純日本のものとは考へ

られないので、これは、漢籍と共に支那から伝来したものである（支那はこの説明を恐らく印度より受人れたものであらう）。然し又、これ以前に既に存在してゐた考へと、或る程度まで一致したので、此処に織込まれたものであらう。（岡正雄〔197二七頁〕などと呼応する月の陰（月の模様）をめぐるエッセイ、凡庸な朦朧的思いを不用意にただ言葉にただけと考える他ない。

良寛の長歌「月の兔」を本攷では扱うのだから、その全体を引きたいところである。だが、かなりの長さを持つものであるから、なぜかそれはためらわれる。現段階では、最も網羅的にその良寛の長歌「月の兔」を収録している谷川敏明〔1966〕⁽¹⁰⁾に依拠してもらうしかない。ともかくも、それらを前提として、以下の議論があるのだということを断つておきたい。

有名な『還元録』、相馬〔1916〕を書いて、東京生活に終止符を打ち、故郷の越後糸魚川に帰つたのが、大正五年、そして良寛マニアになつて良寛に関する第一の書、有名な『大愚良寛』、相馬〔1918〕を刊行したのが大正七年、いつしか良寛の長歌「月の兔」の大的ファンにもなつたらしい相馬御風のその感想が以下のものである。

「この平安朝時代に書かれたくどくしい説話に比べると、良寛の長歌は遙かに単純化され、しかも古調を帯びてゐる。そればかりでなくそれは因果説などから切り離されて、純粹に童話化されてゐる。そしてそこに却て胸を打つものがある。」（相馬〔1941/1974〕一四六頁）

御風は、良寛の「月の兔」を読んだ後、類似の仏教説話となつてゐる『今昔物語』巻五の第十三の「三獸行菩薩道堯燒身語」の「月の兔」譚と比較して、こう言つたのである。『今昔物語』の「月の兔」は、明らかに、仏教で言う「菩薩道」という枠組みの中で展開している。それらの説明が、仏教の知識のない子供などには「くどくしい

説話」であるという印象を与えるものであるが、良寛の「月の兎」にはそうした枠組みがなく、仏教の知識のない子供たちにもストリートに伝わる「美しい心」の物語となつていてと言いたいのであろう。それを御風は「単純化され」「古調を帯び」「因果説などから切り離されて、純粋に童話化されてゐる」と評したのである。

そして、御風はさらに以下のように言う。

「良寛はおそらく此の話がたまらなく好きであつたであらう。そして到るところでこどもたちを相手にその物語をして聞かせたであらう。私はそんな風に想像した結果、『良寛坊物語』⁽¹⁾の中にも『良寛さま』⁽²⁾の中にも、老托鉢僧良寛がそのあはれなしかしこよなく美しい心を持った兎の物語をこどもたちにしみじみ語り聞かせてゐる光景を叙した。良寛みづから長歌の終りに「聞くわれさへも、しろたへの、ころもの袖は、とほりて濡れぬ」と詠嘆してゐるやうに、私はその物語を語り聞かせてゐる老良寛の目にも、またそれを聞いてゐるこどもたちの目にもおなじく涙が輝いてゐたと書いた。」(一四六—一四七頁)

御風は「あはれなしかしこよなく美しい心を持った兎の物語」と捉えている。「あはれな」というのは、無理に死ななくてもよいのに結果として死んでしまうのだからだろうか。「美しい心」とは、不幸な他者を親身に思いやる兎の心を指してそう言うのだろうか。

良寛がこの話を長歌にして歌つた結果、今日われわれは「良寛の長歌「月の兎」を読むことが出来ているのであるが、御風が特に注目して記している「良寛の涙と子供たちの涙」についての掘り下げはどうしたものだろう。御風は、あつさり」と「あはれなしかしこよなく美しい心を持った兎の物語」に感動したが故の涙であると記している。本攷はいわばこの「月の兎」にからめて話題に上る「涙」の実質をさぐる試みと言い換えてもよい。

「良寛はおそらく此の話がたまらなく好きであつたであらう。」の良寛を御風に入れ替えても妥当する一文である。

加藤〔1979a〕には、御風が入手した長歌「月の兎」の墨跡（二九—二二頁）とそれを入手した折の「昭和七年早春」の日付のある御風の以下の「月の兎跋文」（二三—二三五頁）が掲載されていて興味深い。「良寛筆「月の兎」／月の兎の伝説を詠美志良寛和／尚の長歌は、余の常爾愛誦措く／可ざるところ爾して読む多び爾あ／都起な美多能頰をな可る、／をおほ由。仍て此礼可真跡を／もとむる古と多年、今漸く／爾してこれを得多里。雀躍何／ぞ禁じ得んや。／古者もと糸魚川町牧江靖齋の／蔵せいしところ、同家の子孫特爾／余可為爾割愛す。鳴謝すべき／なり。靖齋ハ西蒲原郡国上村／渡部阿部家の出、父ハ良寛和／尚と親交ありし定珍その人な里。／昭和七年早春／相馬御風しる須」（二二五頁）

御風自身、「読む度に熱き涙の頬を流るゝを覚ゆ」と記している。

「愛の人」としての良寛像を定着させたのは、相馬御風であろう。御風は良寛についての最初の著作『大愚良寛』の中で、「…更に次の長歌一首によつて知らるゝ如き熱烈なる犠牲的の愛の讚美者としての彼であつた。」（相馬〔1918／1942〕一四一—一四二頁）と言ひ、その長歌全篇の引用に続いて、以下のように言ふ。

「要するに良寛は謂ふところの傑僧でもなく、謂ふところの学者智者でもなく、謂ふところの聖者でもなく、将又謂ふところの白眼子でも世人でもなく、實に最も淳真なる人^間であつた。最も博大なる愛の人^間であつた。彼は何よりも童男童女を愛したが、彼みづからも最後まで同じく幼な児の如き淳真な人間だつたのである。」（一四三頁）

こうした記述を通して、相馬御風という人の美しい心根のようなものが感じられるだろうか。だが、わたしは、これまで、相馬御風に対するマイナスの評価をだれ憚ることなく放言した伊丹末雄氏の文章に浸かり過ぎてしまつ

ためたろうか。御風の文章をやはり素直に受け止めることが出来ない。伊丹氏は次のように言う。

「相馬御風の良寛研究の最初のとめが、今触れました『大愚良寛』ですが、ここに、もうセンチメンタルな彼の良寛像がはつきりと描かれているのであります。／＼実際、良寛の名を全国に知らしめるには功績の多かった人ですけれども、日本人好みの、感傷的な良寛という人物のイメージをつくり上げてしまった責任は、大きなものがあるのだと考えます。御風の説明した、清らかな、悟り切った禅僧良寛が、そんな、かんたんな人でなかったことは、もうご理解くださっているのではないか、と思うのですが、それを御風が俗受けする良寛にしてみましたのであります。」(伊丹 1994 二三五頁)

伊丹氏の独特の良寛理解というものがあるとすれば、それは、次のような一節からもうかがうことが出来るのではないか。

「国上寺（西蒲原郡国上村）所蔵良寛和尚手沢『源氏物語湖月抄』の表紙裏には、

残しおくこのふる文は末長くわがなきあと
の形見ともがな

と各冊書体の変化を工夫して記されているが、これは深く注意すべき事実であるまいか。和尚が自らまとめた集や詩集を編まなかったということから、すぐにそれらを―即ち自分を―後世に伝えようとする積極的意志をもたなかったと判断するのは、やや早計に過ぎると思う。生涯あれほど勉学を積み、歌においていえば『万葉集』のみならず『古今集』以下をも自由に活用しうるまでに達した人が、はたして己が芸術を残したいとの欲望を有しえなかったか否か。現に和尚には未完成の自筆歌集『ふるさと』があるのであるし、手紙一通認めるにも時に下書きを作り、書き直したりしている。また同じ歌を何度も推敲し続けて、ためにしばしば初案とはまるで違ったものになりましたではないか。」(伊丹 1974 二〇七―一〇八頁)

伊丹氏がこう書く時、氏は間違はなく良寛和尚と自らを重ね合わせているはずである。伊丹氏は、伊丹〔2001〕の「はしがき」の冒頭を、代筆者を立てて、次のように始めている人である。

「私は六年余前に脳梗塞という厄介な病気に見舞われ、字を書けなくなってしまった。くやしき、もどかしいけれども、すでに十何冊かの著作を公表できたのであるし、これが自分の運命であろう、と諦め、文字と無縁の生活に耐えて過ごしてきた。」

伊丹氏の次の記述をわれわれはどう受け止めるべきか。

「良寛が死去した後、ふとんの下から三十両、または四十両の金子が発見された、との伝承を、相馬御風などが口をきわめて否定いたしました。……三十両または四十両をふとんの下に備えて死んだという良寛もまた、まことに自然に受け入れることのできる人間ではありませんか。いたずらに良寛に清浄を要求する人は、実は良寛の人間性を殺してしまおうとしているのであります。金を持って死んではならない。貞心尼と体の関係があつてはならない、などという人々は、良寛をほんとうに理解していませんのであります。極論すれば、さつさと良寛を離れればいいわけがあります。そういう人はおそろく偽善者の類であります。そんな人々が遠ざかろうが、どうしようが、良寛に対する世の評価が大きく揺り動かされるおそれなどありません。彼の歌を読んで共感し、詩に感動し、書を見てとびつきたくなる、というわけで私は良寛を尊ぶので、よしんば和尚が悪党であろうとも、魅力の減るおそれがないのであります。」(伊丹〔1994〕九二―九三頁)(伊丹〔1974〕八八―八九頁)

だが、伊丹氏の先生筋の良寛研究者、立派な『良寛全集』の編纂者でもある東郷豊治氏にしても、その「良寛の

長歌「月の兔」理解は、素直に受け入れることは出来ない。東郷〔1963/1980〕に「この説話の原形は仏典に求められ、いわゆる本生譚の一つとして知られているが、兔が月の世界に生まれ変わる話は、『今昔物語』が初めてのようである。」(二二二頁)とあるのは、いかなるものか。良寛の「月の兔」譚は、何種類も知られているが、どの話も「兔が月の世界に生まれ変わる」ようなものではない。東郷氏が、その長歌を読んだ上で、そう理解したのだとすれば、まったく理解に苦しむのである。良寛の「月の兔」は、地上で焼け死んだ兔が、月の世界で蘇生するという話ではない。兔の亡骸が帝釈天によって「月の世界」に葬られるという話である。『今昔物語』にしても、帝釈天によって、月「の面」に、その姿が記録されたということに過ぎないのである。その意味で、捨身はしたものの、兔は焼け死ななかった『ジャータカ』第三六話の、「賢いウサギよ、おまえの優れた行ないが永遠に知られるように」と、山を圧搾して山の汁を絞りとり、円い月面にウサギの姿を描いた。」(五七頁)とあるのと、基本的には変わるところはないのである。「月の兔」とは、「兔が今も月の世界で生きている」ことを説いているわけではなく、「月面に残されたある一羽の兔のいわば遺影」のことである。「兔 sasasa」の遺影」を「表面に」持つものが「月 sasim」である。そのようにしか読めない良寛の「月の兔」を読みつつも、勝手な解釈を押しつけて徒に自らの妄想を膨らませている研究者が跡を絶たないように思われる。

そうした中で、近代に於ける良寛の「月の兔」の喧伝者となった相馬御風と安田鞆彦両氏の良寛の「月の兔」理解、そしてそれらと深く結びついた坪内逍遙の戯曲「良寛と子守」⁽¹³⁾中の、「へ……せめて炙り肴まぬらせん、はやめせ、と言ひもあへず、炎の中に躍り入り、生きながら焼き兔とぞなりにける、へこじきの姿忽然と御佛と拜まねたまで、美妙のおん聲ほがらかに身を殺しても他を救ふ、これこそよなき功德ぞと、うさぎの骸を掻きいだき、虚空はるかに上りまし、月の宮にぞをさめたまふ、へ今も見るなる兔の影の、由來は斯くぞ子供たち、月の鏡に末の世永く、

寫す情けの鑑、小うさぎ。」(坪内[1950]二七六頁)にうかがわれる、良寛の長歌「月の兎」理解の内実こそが問われるべきであろう。良寛の長歌「月の兎」を二つの文芸作品として見た場合、それを高く評価することにはわたしとしても異論はない。また、それに対する良寛の墨跡を素晴らしいものと評価することにも異論はない。問題は、その作品に籠められた良寛の思い、その作品を通じて知られる良寛の思想の如何がしっかりと問われているかである。良寛大好き人間にとつては、良寛の残したものはなんであれ、「素晴らしい!」、良寛の「素晴らしさ」の証跡であるといふことになることをわたしはただ畏れる。

二 良寛の長歌「月の兎」

良寛の長歌「月の兎」であるが、谷川敏明氏は、以下のように言う。

「長歌の写本および活字本は、以上のほかにかなりある。それによる語句の相違もまた数が多い。ここでは、遺墨の三種と、やや相違の大きい写本の一種を掲げた。六〇七は文政三年ころ、六〇八は文政四年ころ、六〇九は文政十二年ころに書かれたものと推定される。良寛には、自歌の手びかえがなかったというから、記憶によって歌が書かれ、そのつど推敲がなされたものだろう。六一〇は記録した人物の意向が、かなり入っているように思われる。六一〇の歌を収録した林みかお養雄は、秩父出身で江戸の国学者である。かなり越後に滞在していたという。相馬御風氏によれば、天保十四年に越後で記した養雄の紙片があるというから、良寛が天保二年に死亡して、あまり年月のたないうちに越後入りをしたらしい。そして良寛の歌に接して、当時まだかなり残っていた遺墨や写本を見て丹念に収録した。そのとき、すでに六一〇の歌が他者の手で筆録されていて、養雄はそれを『良寛禅師歌集』の中に入

れたものらしい。」(谷川[1996]一七七頁)

良寛の長歌「月の兎」の評価はおそらく人様々であろう。他の人の評価を視野に入れながら、なんとか自身の独自性を打ち出したい、といったところであろう。その「素晴らしさ」の内実は、かなり曖昧である。基準は明確ではない。それに代わるものとしては「感動と涙」がある。良寛さえ涙を流すほどに感動した「月の兎」の話である。帝釈天も「兎」の振る舞いには涙したというのが、わが国に見られる、良寛の長歌「月の兎」観というものであるだろう。兎などの本性を探るべく旅の哀れな翁に扮しているのは、変幻自在の「天帝」Ⅱ「帝釈天」であって、釈迦牟尼「仏」などではないことも深く銘記すべきである。

石田吉貞氏は、石田[1975]の中で良寛の「月の兎」について「この歌は歌としてもつともすぐれたものであるが、そのほかにこの歌のなかには、良寛のもつとも深い心の秘密がひそんでいるように思われるからである。『良寛和尚の人と歌』の著者吉野秀雄も、やはりこの歌を最高のものとして取りあつかっている。」(四七〇頁)と言ひ、「この歌について、御風は熱烈な犠牲的愛の讚美だといひ、吉野秀雄は良寛の愛の博大さを示すものだといひ、多少ニユアンスのちがいはあるけれど、いずれも愛の歌だとしている。が、私は、愛の歌であるとともに、さらにその奥に、良寛を根柢的に動かした一つの感動があつたのではないかと考えたい。」(四七二頁)としている。さらに、石田氏は次のように説明している。

「良寛は長男に生まれ、家を継ぐべき身でありながらそれができず、一家をかなしみのどん底におとしいれたばかりでなく、父を異郷に横死させ、弟を所払いの処刑に逢わせ、ついに由緒正しき家を没落させてしまったのである。家思い、親思い、弟妹思いの情の格別に強いかれにとって、このことは魂を寸断するほどのかなしみであつたにちが

いない。かれが死にもの狂いで修行し、超凡な悟りを得た奥には、絶えずこのかなしみがあるが、彼を鞭うつていたのではないか。かれの悟りが他の禪僧の悟りとちがうきびしさをもち、自己のいつさいを捨てて他に任せるという、自決同様のものではあつたのは、自己のすべてをささげて罪を詫びる心があつたからではなからうか。

自己のすべてをささげ、自己の生涯もささげるといふことは、自己を火に投じ水に投じると同じである。何もささげる物をもたない鬼が、身を焼いてささげたように、何もなすことのできなかつたかれは、己れを焼肉として、父母・家族の前にささげようとしたのではないか。少なくとも、月を仰ぎ月の兔をみるとき、かれの魂の奥に、それとひびきあう、痛んでやまないものがあつたのではないか。

かれのいつさいの行動の底には任運があつて、それを動かしていたのであるが、その任運の底には、さらに自己を焼肉としてささげるといふ、壮烈にしてかなしき決意があり、それがつねに、任運に涙と熱とを送り、それを枯瘦と冷却とから救うエネルギー源となつていたのではないか。

かれはこの歌の結びで「白たへの衣の袖はとほりて濡れぬ」といつている。月の兔を仰いで涙をこぼしている良寛、人間世界を離れて永遠のなかに立つている、尊い良寛像を私は想像したい。」(四七三—四七四頁)

いかが。この石田氏の記述は、他の研究者などには見られない、一步踏み込んだ「良寛の長歌『月の兔』」理解がうかがわれて、興味尽きないものがある。そこに描かれる良寛像は、ある意味では極めて文学的で、またある意味では颯爽としていて格好が良い、と言える。まったく人間的な情愛に溢れた名場面と言ひ得るが、その涙は、「禪僧の悟り」などと果たして折り合うものだらうか、との疑問がわく。相馬御風などの「美しい心の兔」への重層的な共感ということなのだらうか。ここには、他者の理解を否定することなく、自分の独自性を追加した結果、朦朧とした感想、意見に墮してしまつたという側面が明瞭にうかがわれるようである。

一方、こうした石田氏の八方美人的な感想とは別に、長谷川洋三氏は、長谷川[1924]の中で決然と次のように言う。仏教の菩薩道などは切り離された良寛の独自の立場を具現したものと、良寛の長歌「月の兎」を位置づけるものであり、長歌「月の兎」に対する自註の如き反歌を添えて良寛自身の「月の兎」観に照明を与えている点でも、好感が持てるではないか。

「自由気ままな乞食僧として何一つなしえぬ「風癪」の己が身が、せめて現実の社会と接点を結ぶ、その最も現実根ざした接し方、せめて人のため世のためにつくしたいと願う心から発した接し方が、「愛語」であつたのではないかと思われる。「月の兎」と題する長歌の中の兎、つまり、心は旅の翁に食物をあげたいと願いながら何一つなしえぬままオロオロするばかりの愚かな兎が、せめて己が身を……と、火中に投じて翁に供した姿は、良寛自身¹⁵がせめて自分もかくありたいと心に願いもした一つの典型であつたのではあるまいか。ちなみに、良寛はこの長歌に、「あたらし身を翁がにへとなりけりな今のうつつにきくがともしさ」という反歌を添えている。」(二三三―二三四頁)

本節冒頭でも触れたが、良寛の長歌「月の兎」に関する限り、われわれは谷川敏明氏の言説に耳を貸すことが不可欠であろう。

谷川氏は、『校注 良寛全歌集』、谷川[1996]の中に、六〇七―六一〇という良寛の長歌「月の兎」の四つの異本を収録した上で、「長歌の写本および活字本は、以上のほかにかなりある。それによる語句の相違もまた数が多い。ここでは、遺墨の三種と、やや相違の大きい写本の一種を掲げた。」(二七七頁頭注)と記している。

良寛の涙の内実¹⁶に言及した研究者は数多くはないが、谷川氏は、次のように表明しているという点でも、看過す

べきではない。

「この中で、うさぎが月の世界に移されるのは、「ジャータカ」および『大唐西域記』『今昔物語』くらいである。しかし良寛は、円通寺時代に同寺蔵の「一切経」を読んだ形跡があるから、この話は早くから知っていたようだ。

ただ『大唐西域記』を改めて読んで、うさぎの行いに感動したのはもちろんだが、わが身は「捨身」の点で、うさぎより劣っているとして、「反省と賞賛の混在した涙を流したものと思われる。」(二七八頁頭注)

傍線部にあるように、良寛の「涙」の実質を「反省と賞賛の混在」と捉えるこの谷川氏の立場は、相馬御風の理解する涙とはかなりかけ離れていると考えられる。

『今昔物語』の全訳注を刊行した国東文麿氏は、その「月の兎」譚を、『大唐西域記』の同エピソードとの関係を、次のように論述している。

「本話をはじめに、「兎・狐・猿の三の獣有りて誠の心を発して菩薩の道を行ひけり」とあるように、老翁を養うためにわが身を焼いた兎の行為は、利他(他者をいつくしみ救う)を旨とする菩薩行である。『大唐西域記』にみえる同じ話も、その冒頭は「是如来修菩薩行時焼身之処」としている。『西域記』の記事は本話に比べ簡単ではあるが、はじめに狐・兎・猿の三獣を出したあと、兎が帝釈によって月の中に籠められ、以来月の中に兎がいるようになったという結末まで、内容的にほとんど本話と一致する。

思うに本話は『西域記』の話がわが国で説経用に作り変えられ、それによって書かれたものであろう。その説経は兎の行為を通じて人々に誠実で犠牲的な利他の行ないのたいせつさを教えようとするものであり、それをより効果的にするために、狐・猿に『西域記』の話にはないさまざまの食べ物を取って来させて兎の無能力さをきわだた

せる一方、ぎごちない姿で食べ物を捜し歩く兎を描くことによつて誠実な心を強く訴えようとする。この兎の描写はあの焼身と相応じてあわれの感を深めるものであり、そのための写真である。」(国東1981二七四—二七五頁)

この国東氏の記述の傍線を付した部分をしっかりと受け止めるべきである。

国東氏は、これとの関連で良寛の長歌「月の兎」にも言及して、「これは良寛が直接『西域記』の話に拠つて作ったものである。」(二七七頁)としていることにも注目すべきであろう。

『今昔物語』と『大唐西域記』の「月の兎」のエピソードの問題点を的確に指摘して論じているのは、篠原昭二氏であろう。

『大唐西域記』では、兎を責めるのは、帝釈天の化した老夫である。それは、雪山童子を試したのも帝釈天であったことを想起するまでもなく、修行者の本心をぎりぎりの所まで明らかにしようとする仮借のない試練であるからである。自分には不可能だといつても、それを許さない。修行者への苛酷な要求を仏教はした。『今昔物語集』では、兎を焼身に導いたものは、菩薩行における試練であるよりは、猿や狐の無能を笑う嘲笑の声であり、兎自身による一つの現実認識であった。ここには、『大唐西域記』と『今昔物語集』との違いというよりは、仏教理解においてつねに周囲の目が行動の最大の要因になるという、わが国の社会倫理が大きく顔を出しているというべきかもしれない。」(五八一—五九頁)

この視点を相馬御風を初めとする良寛の長歌「月の兎」に対する種々の「感動」を宣揚する者たちの言説に適用すべきであろう。感動の根源を「兎の美しい心」に帰すことの空しさを声を大にして言挙げすべきなのではないか。「兎の美しい心」に感動して涙する、とはどのようなことだろうか。

書道の専門家として良寛についての書物を多数刊行している加藤偉一氏の以下のような要約を目にすると、氏に
とつては、長歌「月の兎」の内容などどうでもよいかに見える。

「月の兎」（別名三人の友）は良寛の代表的長歌の一つ。仲よしな猿と狐と兎のところへ神様が乞食に身をかえて
何か食べるものがほしいという、兎は自ら火にとびこんで肉をさし出した。美しくも悲しい自己犠牲と愛の物語
である。」（加藤 1979a: 11頁）

また、加藤氏は、先に見た相馬御風の「月の兎跋文」を紹介し、以下のように記している。

「月の兎」は良寛の自詠自書である（19頁参照）。その長歌巻の末尾に、御風翁が跋文を書いている。「常に愛誦
してやまず、読む度にあつい涙がこぼれた」というのは人一倍感激性の強い翁ならずとも、誰もが一読して涙をこぼ
さずにはいられない名作だからである。石田吉貞博士の名著「良寛―その全貌と原像」でも、良寛の最もすぐれた
歌として結びに用いられ、吉野秀雄氏の名著「良寛和尚の人と歌」でも最高の歌として絶賛している。

良寛研究に半生をささげた御風翁なればこそ、この歌巻を手に入れた時の喜びは、足が地につかぬほどだったこ
とも、十分推察できる。しかも出所が、良寛と直接親交があり、良寛最大の理解者であった阿部定珍の家に伝わり、
その子牧江靖齋の子孫からときわめて明瞭であるのも、史的価値が高い。」（二二五頁）

また、加藤氏は、石田吉貞氏の「自己のすべてをささげ、自己の生涯もささげるといふことは、自己を火に投じ
水に投じると同じである。何もささげる物をもたない兎が、身を焼いてささげたように、何もなすことのできなかつ
たかれは、これを焼肉として、父母・家族の前にささげようとしたのではないか」を踏まえ、以下のように結んでいる。

「良寛にそれが出来たのは、一面において親兄弟を捨て、妻をめとらず、子供をもうけず、自分一個の生活に徹し

たからであろう。他人の為に財産等の物質のみならず、おのれの生命までもささげるには、そこまで徹しなければ出来ないことである。

それにしても、兎が命をおとす前に救えなかつたものであろうか。神様なら兎の気持がわかつただろうに。¹⁶ もつともそれではこの物語は成立しなくなる。悲しくも美しい物語である。」(二四四頁)

相馬御風、石田吉貞氏、そして、加藤僖二氏の「良寛の月の兎」をめぐる三者三様の言説の空疎なことを指摘したい。近代以降に雨後の筍の如く乱出した「良寛臆履」への痛烈な批判的な視点を打ち出した伊丹末雄氏の良寛論の持つ意義を力説したい。

「月の兎」をうたつた長歌は有名であるが、彼はきつと目に涙をためて書いたであろう。しみじみした日常生活。これだけ静寂な生活をする事が出来た人は他には一寸ないのではないかと思われる。」(武者小路「1968」一四六—四六九頁)

相馬御風は、良寛の「月の兎」の典故を列挙した上で、

「良寛は果してどの古典によつて此の月の兎の話を知つたのであるかわからないが、良寛によつて此の話がしかく単純化され、且情味深く詩化されたことはいふに及ばないことである。」と記している。傍線を付したが、御風は、良寛が「単純化」し、「情味深く詩化した」と見ているのである。それに続けて御風は「月の兎」に関して、次のような興味深い事実を伝えている。

「これは又私が想像化したやうに良寛その人がこどもたちに話して聞かすべくいかにもふさはしい物語である。故

坪内逍遙博士が舞踊劇『良寛と子守』の中で、この話を常磐津でうたはせ躍らせるやうに仕組み、大いに効果を収め得たのも宜なるかなと思はれる。

坪内先生から、あの作をものされるに當りいろゝ御相談に預つた機會に、私は特に先生にお願してその常磐津の歌詞を揮毫していただいた。その折先生は念入りに二様にそれを掻いてくださった。私はその一をやはりこの良寛の月の兎の長歌を畫題にした大作を日本美術院展覽會に出陳して人々を感嘆させた安田靉彦畫伯に贈り、その一を私自身良寛の月の兎の長歌の墨跡と共に珍藏してゐる。」(相馬[1942]一四七—一四八頁)

どうも良寛の讚美者の行き着く先は、この、何か(書である場合が圧倒的に多い)を「珍藏」することのようである。

イスラム神秘主義と同じレベルで良寛を論じようとする五十嵐一氏の言うところに耳を貸そう。氏は、良寛の長歌「月の兎」に対して次のように言う。

「結論を先に述べれば、これは動物でなければ出来ない自己犠牲の物語なのであって、人間のよくするところではない。その限りで十分に感動的ではあるが、だからといって人間にそのような自己犠牲を強いることが適當であるとか、人間の方が動物よりも一段高いか卑いという訳ではないのである。否、精確に言えば、そのような自己犠牲が出来ないという点で、人間は動物よりも卑い存在である。しかしにも拘らず、人間にはそれを知る哀しい知恵がある分だけ、動物たちよりも高みに上れるのである。

良寛が感動した所以は、兎に代表される動物たちの純粹さ、そして思い切つた行為をする能力もしくは超能力であつた。……

ルーミーが喝破したように、人間が他に誇れるのは知性の能力だけであつた。しかもその能力とは、自分がいか

に優れた能力の所有者であるかとの自覚や自信などではなくて、スフラワルデーの説く悟りの知識において、自己の受動性の反省的自覚に他ならなかった。その根本精神は兎の純粹さに感動し、猿や狐の能力を賞讃する良寛の歌心と一つなのである。」(五十嵐〔1989〕二一九―二二〇頁)

この五十嵐氏の良寛の「月の兎」解釈は、ある意味ではまことにユニークなものと言い得るし、その物語の持つ重要な二面を照射する力を持つものではあるが、自己の仮説に当てはめるためのふしだらな「事実誤認」が認められる。良寛の感動は、五十嵐氏が言うように、動物たちのみんなに向けられているわけではない。良寛は猿や狐の所業に感動しているわけではないのである。動物たちの五十嵐氏の言う「人間のよくするところではない」「純粹さ」に感動しているわけではない。ただし、「純粹さ」という言葉をノーテンキに用いているという点では、筆者が本放で指摘したく思う「純粹好きな」相馬御風の解釈に通じるところがあるように思われるのである。

良寛の「月の兎」のはなしのポイントは、吉田絃二郎による子供向けの物語の中にも現れる以下の点であろう。

「旅のこじきはそれを見て、

「うさぎさん、あなたもわたしに、何かたべさせてくださいませんか。」

といったそうじゃ。

うさぎはこじきのことばを聞くと、はずかしくなり、うつむいてしまったが、何か思いついたらしく、そばにいたさるにむかつて、こういつたげな。」(吉田〔1965〕一四頁)

そして、その物語に対する涙とは、以下の件に現れる涙に通じている。

「天の神さまは、ほのおのなかのうさぎをだきしめて、

「うさぎよ、おまえはほんとにやさしい子だったのう。おまえは何もわたしにたべさせてくれなかつたけれど、おまえはおまえのいのちをわたしのためにささげてくれた。ありがとうよ。かわいそうに。」

と、天の神さまは、また、ぽろぽろと涙をおこぼしなされたかとおもうと、うさぎをだいたまま月の世界へのぼって行かれたげな。(吉田[1965]一六頁)

大人たちの悲しみの涙は「捨身」に追い込まれた兎に対する「同情」、「可愛そうな」に起因すると言えるが、その物語の聴き手である子供たちの涙は、むしろ愛すべきうさぎへの「惜別」の涙と考えるべきである。

吉野秀雄はまた、以下のように要約している。

「さらにまた良寛のつくった長歌に『月の兎』というのがあるが、これはうさぎがおれの身を火中に投じ、そのあぶり肉をもつて旅人の飢えを救ったという昔ばなしを主題にしたもので、良寛がどんなにうさぎのこの捨身犠牲の精神に感動していたかは、その長歌の調べでもわかるし、その長歌を書いた遺墨が幾通りも伝わっていることからあきらかである。良寛はこのうさぎをおもつて、ほんとうに涙を流すことのできた人であった。」(吉野[1965]二〇〇—二〇二頁)

また、良寛については何度も書物を書いている吉野秀雄であるが、吉野[2002]には、「題詞の「月の兎」はもちろんこの長篇の主題。「三たりの友」と題したのもある。遺墨も多く、詞句の相違も三系統あるが、ここには相馬御風報告の、阿部定珍の子靖斎牧江定憲旧蔵の遺墨を本文とした。」(三四二頁)と引き、書物の最後を、「良寛は兎の犠牲邁往の精神に、仏法慈悲の理想的究極を感じていたに相違ない。良寛の長歌中の雄篇であるとともに、思想

内容から見ても、最も重要なこの歌を最後に据えて、本講を閉じることにする。」(三四五頁)と結んでいる。吉野秀雄は、「犠牲邁往の精神」を最も重要なものと考えているようだ。「犠牲を払うことに躊躇せず、勇敢に突き進む精神」ということだろう。

良寛の長歌「月の兎」を良寛が記した墨跡を高く評価したのは相馬御風や画家の安田靉彦ばかりではない。「書は心の鏡であり反映ですから、良寛の生活自体が飄逸でも洒脱でもないのは無論です」(津田[1935]二八九頁)とする津田青楓は、「良寛の書とその人間性(上)」章で、「月の兎」に触れて次のように記している。

「良寛の仮名文字は道風の「秋萩帖」を学んだと言ひ、あるいはその影響を受けたと言はれてゐるだけに、初期の字は肉も太く線も大まかで、所謂良寛風の繊細遊絲の趣はありませんが、その頃のものは良寛が未だ自分自身の姿をはつきり見出し得なかつたか、それとも「秋萩」の影響をうけ、そこから学ぶだけのものを学ばうとするため、ことさらあのやうな字を書いてゐたものと思はれます。段々後になるに従つて素朴さと大まかなのが次第に冴えてきて、線は細く巧みになり、春雨の綿々としてつきぬやうな趣の小味な書体になつてきてゐます。「月の兎」と云ふ長歌はこの外うつくしく整然として一字一畫をもゆるがせにせぬ良寛の線に対する神経質さが遺憾なく發揮されてゐます。全身の神経をたゞ一つの筆の穂さきに集中して、しかもそれにこだはらずたのしく又嚴肅に始めから終りまでゆるみなく書き終へてあります。」(津田[1935]二八五―二八六頁)

津田青楓にとつても、関心は「月の兎」ではなく、それを書き付けた良寛の書と思われる。

あの吉本隆明氏さえも、良寛の長歌「月の兎」について書いている。よせばいいのと思わぬものではないが、誰かが何かを言っていることを知っていて、自分が口を噤んで通り過ぎることは出来ないのだろう。

「いま、おそれずにもつと色濃い（アジア的）な思想の特質のなかに良寛を沈めてゆくことにしましょう。良寛に「月の兎」という長歌があります。『今昔物語』の巻五にある寓話を主題にしたものです。今は昔、猿と狐と兎が一緒に暮らしていて、そこに天帝がよぼよぼのお爺さんに化けた恰好をしてやってきました。「何か食べさせてくれ」というのです。すると猿は木の実を採り、狐は魚を採ってきてその老人にあたえました。兎は何か採ろうとおもっても何も採れませんでした。へへそこで兎は猿に芝を刈ってきてくれと頼み、狐にはそれで火を焚かせ、じぶんは何もあげないが、焚火のなかに飛び込んで、自分の体を焼いてその老人に食べさせました。すると老人が忽ち天帝の姿にもどつて、その兎を浄土へ連れて行きました。この長歌にも良寛のおなじ視線がさしこんでいます。」（吉本 [1992] 六一頁）

何を言おうとしているのかさっぱりわからない文章。食べさせるべく、火の中に飛び込んだということ、そして天帝が、「焼き兎」を食べずに、月に葬ったということ、吉本氏にとって良寛の「月の兎」の話は、それに尽きている。吉本氏は、筆者が吉本氏の要約の中に挿入したへへの部分の意味を一切顧慮していない。そして話もいつの間にか「月」の話ではなく「浄土」になつてしまつている。「天帝」についての知識もないのだろうか。「良寛のおなじ視線」とは何だろう。

吉本氏の朦朧に対して、北川省二氏の以下のような書き方は、異を唱えようもない明確なものである。

「次の長歌「月の兎」なども『万葉集略解』を読んだあとに書かれたもので、彼の歌の中ではもつとも長いだけでなく、最高のものの一つとして評価されています。仏典や『今昔物語』にも載っている月の兎の由来記に材を取つたものですが、生身の体を犠牲にしたけなげな兎に、良寛は心底から感動し、月を見上げるたびに掌を合わせて、その兎を弔つ

たことでしよう。」(北川[1983]225頁)

この北川氏は、相馬御風に匹敵するほどの多数の良寛本の著者である。

良寛の長歌「月の兎」の末尾に置かれた「……いまのよまでも、かたりつき、つきのうさぎと、いふことは、これがよしにて、ありけると、きくわれさへも、しろたへの、ころものそでは、とほりてぬれぬ。」(相馬「良寛を語る」一四三頁)に表される、「良寛の涙」の意味を問いたい。良寛はいつたい何に感動して涙を流したのか？ また、それに先だつて描かれる、「おきなはこれを、見るよりも、ころもしぬに、ひさかたの、あめをあふぎて、うちなきで、つちにたふりて、やゝありて、むねうちたゞき、まうすらく、」(同一四三頁) 天帝⇨翁の涙の意味を問いたい。

「泣く⇨涙」は、その者の感動を表しているのだろうか？ その話の読者、聴き手の「泣く⇨涙」は、何だろうか。物語の登場人物である「天帝の涙」、そして第一の聴き手にして語り手である「良寛の涙」。そして相馬御風などの話にあつては、第二の聴き手である「子供たちの涙」、そして、第三の聴き手であり、読み手であるわれわれ「読者の涙」を問題にしたいのである。

良寛版長歌「月の兎」の四版(六〇七、六〇八、六〇九、六一〇)を伝える谷川[1961]。

六〇七「翁は是を 見るよりも 心もしぬに 久方の 天を仰ぎて うち泣て土に僵りて ややありて 胸打叩申すすらく……」(一七三頁)

六〇八「翁はこれを 見るよりもしなひうらぶれ こひまろび 土うちたたき申すらく……」(一七四頁)

六〇九「旅人はそれを 見るからに しなひうらぶれ こひまろび 天を仰ぎて よよとなき 土に倒れて ややありて 土うちたたき 申すらく……」(一七六頁)

六一〇「翁はこれを見るよりも心もしぬに 久方の 天を仰ぎて 嘆きつつ 土に倒りて こいまるび 胸うち叩き 申すらく・・・」(二七八頁)

良寛の長歌「月の兔」に於ける、天帝の涙だけは明白であろう。自身の〈虚偽〉によって何の罪もない〈まじめな〉兔を死なせてしまったことに対する後悔、反省の涙である。

池上海一氏の以下の言に注目したい。

「中国には仏教が伝来する以前から月に兔がいるという伝承があつた、日本でもまた、土着のものか中国伝来のものかは定めがたいが、古くから月の兔が信じられていて、日本人は仏教によつてはじめて月に兔がいることを教えられたわけではなかつた。なによりも先掲の北伝の諸経典はどれ一つとして月と兔の関係を説いてはいなかつたのである。南伝の『ジャータカ』では兔の行為に感動した帝釈天がその兔を万人に見せるために、山を搾った汁で月に兔の姿を描いたと語っているが、兔自身は月中にいるわけではないから、この話の兔は仏の前生であつたと説いて矛盾せず、本生説話として自然である。つまり月にいる兔を語つたのは『西域記』が最初であり、それは仏教説話として自然な本生説話であるよりも、民間伝承としての月の兔の由来譚であることの方に比重を移した話であつた。

この話は菩薩道の極致としての自己犠牲を語つて感動的だが、さらにわれわれ日本人がごく親しいものと感じている月の兔の由来譚であることが感動を増幅させる。この話の兔は聖者釈尊の前生というような大層なものではなく、われわれが今日も見上げているあの月の兔であつて、それは聖者というよりも凡夫であるわれわれにより近い存在であり、そういう存在が精一杯に示した行動として受け取るからこそ感動は高まる。有名な禅僧良寛和尚もこの話を長歌に詠み、その末尾を、

今の世までも語り継ぎ、月の兎といふことは、是が由にてありけると、聞く吾さへも白袴の、衣の袂は、とほりてぬれぬと結んでいる。

要するに、本生説話が『今昔』において変形しているのではなく、『今昔』は本生説話としての型式を失った話と出会っているのであって、わが国古来の民間伝承との相関の中で独特の魅力を創出した二例として注目されるのである。(池上[2008]四四七―四四八頁)

西野好子[1982]には、「月といえは、「月の兎」という仏典にもとづいた、歌というよりも、むしろ教化の為の説話の感じのする、清らかなお話を長歌となしたものがある。」(一九八頁)とある。

白石良夫[1981]によれば、南北朝時代の歌論書『愚問賢註』には、「これ人の物を感じる事ふかく、其心切なるによりて、三十一文字に書きつくさざれば、長歌を詠す。」とあるとか。白石氏はそれをうけて「深く限らない心情を言い尽くすには長歌でなくてはならない、短歌のごとき短さでは不十分であるという。」(五四頁)と記している。

だが、良寛の長歌「月の兎」の全篇を掲げた後、それに対して白石氏は以下のように言う。

「右は良寛の長歌作品のなかの雄編であり、同時に遺墨や伝写の数もきわめて多いとされる。本文は『はちすの露』所収のものにより、適宜漢字をあてた。

内容は、月の中に兎が住むにいたる話である。この説話は本邦では今昔物語集天竺篇に載る(巻五「三獸行菩薩途兎焼身語」)のであるが、今昔物語集の流布状況からして、今昔物語に拠るとするよりも、巷間に伝えられた話

からか、あるいは良寛であるから、大唐西域記などの仏典から得た知識であろう。」(五〇頁)

竹田道太郎氏は、相馬御風と並んで良寛のプロモーターとして有名な日本画家の安田軼彦伝の中で、その絵巻「月の兎」にからめて次のように言う。

「第二十一回院展へ出品した「月の兎」「挿図三七」は『今昔物語』にもおさめられている仏典の本生譚を題材にして、軼彦画には珍しい絵巻形式を五十尺余に及んで展開させ、しかも淡彩といっても白描に近い描写を行っている。全段が「みたり友」「旅人」「幽谷」「ゆきなつむ旅人」「兎かける」「焚く火」「焰の兎」「天の尊」「月の宮」の九図から成る。仲のいい猿と兎と狐がいたが、行き悩む旅人を猿は木の実、狐は魚をとって介抱したが、兎だけは何も獲られず、困った兎は、猿と狐に火を焚かせてその焰の中に生贄となつて贄を果せうと身を投じた。この旅の老人こそ天帝の変身だったから、兎の犠牲的行動に驚き、悲しみ、小さな軀を天上に持ちかえり、月の宮に葬った。この物語に良寛が長歌をよんでおり、その反歌に「あまのはらとわたる月の影見れば心もすんに古へおもほゆ」とある。淡彩絵巻は、この良寛の歌によって描いたのである。」(竹田二〇八頁―二一五―二六頁) かなり上手にまとめていると思われるが、「贄を果せうと身を投じた」ことと、「犠牲的行動」は果たして、調和するだろうか。「犠牲的行動」よりは「誇り高き行動」と呼ぶべきではないのか、ということである。

良寛研究の成果として最新のものと言い得る新関公子[2019]には、良寛の長歌「月の兎」に関して、以下のよう
うなややユニークな視点が表明されている。

「この物語は釈迦の前世譚『シャータカ』をはじめ、各種經典にある仏教説話で、日本では『今昔物語』の巻五第

二三話として流布しているというが、良寛の長歌の巧みさは、この物語を神代の昔のことという雰囲気を持たすために、猿を「まし」狐を「きつに」兎を「をさぎ」とわざわざ自分でかなを振ったことだ。古代にそんな発音をしていたとは誰も知らないのだが、「まし」と「きつに」と「をさぎ」なら、そんな仲良しの暮らしもあるかもしれないと思うような物語世界がこの三語によりかもしだされている。そして教訓らしいことを一言も述べず、この月の兎の伝説の由来を聞く度に良寛は、「をさぎ」のけなげなさにいつも袂がぐっしりとなるほど泣けてくるのです、とさらに物語を遠い時空へと間接している。この巧みな設定が、じつは残酷な話でもある仏教説話の説教臭を抜き、童話的な世界を生み出している。

私は寺泊小学校の学芸会で、「わたしのからだを火に焼いてあなたに御馳走いたしましょう」と歌いながらたき火の中にびよんと飛び込んだ友人の姿を今も思い出す。その音楽劇の兎と猿と狐のお面を描いたのは私だった。貞心尼は「蓮の露」のなかで「月の兎」を「あはれにたふとく打ずしぬれば、おのずから心のにごりもきよまりゆくこゝちなむせらるべし」と評している。(新関[2016]四九二頁)

良寛の涙は、死なずともよかった兎が死んでしまったことへの哀惜であろう。美しい心に感動したというものではないと考える。「美しい心」とは、そのような場合に用いるものだろうか。何であれ、見る者の涙を誘うものを「美」と片付けるのはいかかなものか。良寛の「月の兎」は、「布施」や「慈悲」や「利他行」を喧伝する仏教的なエピソードと言っよりは、むしろあまりにも人間的な激しい抒情的なドラマと言っべきなのではないか。

むすびにかえて 良寛の思想と良寛の書、良寛論の方へ

とにかく良寛について書いたものが夥しい数量出回っている。わたしが、今回本攻を起すにあたって参照したもののだけでも、かなりの数量に及ぶ。驚くばかりだが、わたしが見る限り、伊丹末雄氏の良寛論は、わたしには、本音と揺るぎない信念に貫かれているという点で、抗いがたい魅力を感じる。

「禅僧、曹洞宗の僧にとつて、老いほど、みじめなものはありません。修行の手段たる坐禅も作業も、肉体が自由な時代にのみ可能で、起居も思うにまかせぬ老境に達しては、俗語で表現してみたら、陸に上つた河童の如きものであります。この老いの苦しみ、寂しさに、さしもの良寛も完全に圧倒されたのであります。乙子神社時代の後半、すでに遍澄と同居して、半ばその扶養を受けて生きた良寛が、いよいよ遍澄に出て行かれることになり、そのまま一人、居残つて曹洞宗の僧としての生活を頑強に守るか、それとも自分を迎えてくれる俗界に身をまかせるか、という精神の岐路に立たされ、結局、選んだのが後の生活だったわけです。……寄る年波に勝てず、もつとも頼りにしてよい木村家のせわを受けるために、真の意味の曹洞禅を捨てた良寛。良寛はまぎれもなく宗教上の挫折者であります。」(九五—九七頁)

伊丹氏は、これに先立つ箇所では、以下のように論を展開している。

「すくなくとも若い時代の良寛が、曹洞宗を求めて出家し、禅僧として修行に精進したことは、まちがいのない事実で、心から宗祖・道元を敬仰しております。ところで、その道元ほど仏教の純粹を望んだ僧も珍しい。道元において、曹洞宗だけが仏教なのでありまして、「わが国においても、しかあらんことを」、日本においても、きびしい曹洞宗が広く行われるようにしたいと念願して帰国し、終生、弟子を鍛えたのであります。その道元の教えを体したであ

ろう良寛が、

良寛に辞世あるかと人間は、南無阿弥陀仏といふと答へよ

と書くからには、はつきり言つて、もはや道元に背を向けているのであります。融通無碍などと批評して、ごまかせる性質のものでないと思ひます。つまり、良寛が曹洞宗を拋棄したことを認めないわけにまいりません。木村元右衛門の請いをいれて、浄土真宗の寺院たる隆泉寺の木村家墓地に永久の眠りを続けることを決めたのがなによりの証拠でありましょう。そうです。晩年の良寛は曹洞宗を捨てた、非僧非俗、僧にあらず、俗にあらず、という存在であつたらしうのであります。」(伊丹〔1994〕九四―九五頁)

伊丹氏は、良寛の生涯を以上のように総括した後、次のように結んでいる。

「良寛がすぐれた芸術家であつたことは、今日あまねく知られておりますが、すでに同時代に生きた漢学者・鈴木文台が、「上人に必ず伝うべきもの三あり。而して道徳は焉に与らず。曰く詩、曰く和歌、曰く書なり」と書き記しているのであります。すなわち、良寛和尚の生活・教化はもちろん、すばらしいが、その死とともに見えなくなつていふものであるから、後世にはつきりと伝えられることはなからうが、和歌や漢詩や書はそのみごとさが残されるはずである、というのであります。この評価は、現今そのまま定まっているところにはかなりません。実にすぐれた見とおしです。」(伊丹〔1994〕一〇七頁)

良寛の和歌と漢詩と書の三つのうちの和歌に数えられる長歌「月の兎」こそが、本稿で問題とされたわけであるが、伊丹氏は、この「月の兎」に触れることはないのである。

良寛の長歌「月の兎」について今回わたしが身の程知らずに攷を起したのは、伊丹末雄氏による「良寛」論に

深く馴染んだせいだが、良寛についてそれこそ果てしもなく多くの人が好意的に論じている中で、例えば松山俊太郎氏による決然たる「良寛評」、松山「2011」を目にしたせいもあった。松山氏はインド学の専門家で、とりわけ「蓮研究の世界的権威」と目されている。先年、その蓮関連の論文やエッセイや講演録を集めた松山「2016」、『松山俊太郎 蓮の宇宙』が刊行されたが、そこにも何故か収録されなかった。「書は人なり」として、良寛の書の愛好家は、こぞって良寛の宗教者としての人品やその紡ぎ出す詩や和歌などまでも高く評価する傾向のある中で、松山氏の態度は、或る意味ではきわめて異質なものである。仏教の教理にまで深く通じている筈の松山氏であるが、良寛の長歌「月の兔」には関説することがないものの、氏の良寛評は傾聴に値する。

「人間というものは、自己を含めて、誰のことも判りにくい。人間に限らず、世の中のほとんどすべてのものは、甚解を求めようとすると、ブラック・ホールの相貌を呈してしまふ。

しかし、邂逅の瞬間から異常な同感と尊敬の念を懐かせる、自分にとつての〈運命の人〉が存在するので、それらの人たちの人格と業績への没入は、成果のいかんに関わらず、人生における飲みの重大な源泉となってくれる。

わたしにとつての良寛は、そのような人ではなかった。

のみならず、親近を試みようとする、いつでも、かれの〈生き方〉という障碍が立ちはだかるのである。

老荘の立場をとらず、〈仏教者〉としての生涯を選択したのであれば、精進の気迫に欠け、安逸を貪りすぎるといふ思いを捨てきれないのである。

おそらくかれの〈資質〉の中に、そうとしか生きさせないものがあつたのであろうと憶測はしても、その事情を納得できるまで突き詰める余裕がもてない。」(二六二頁)

松山氏は、良寛の蓮関連の詩歌の秀でたところのないことを明確に述べた上で、そのエッセイを次のように結んで

いるのである。

「蓮と題したものとしては唯一の作品にしてからが、凡庸な教養の域を脱せず、独創の欠片も光らぬのであるから、他は言わずもがなである。

しかし、良寛の〈書〉となると、門外漢の不遜さをもってしても、比倫のないすばらしさに打たれるのであるから、私見としては、その〈詩歌〉の水準をとび抜けた高さにあると断ぜざるをえない。

惟うに、自他ともに認める、生活人・宗教者としての〈先天的などうしようもなき〉が〈書〉においては、他人にはへどうしようもないほどの、天稟〉として輝き、不断の磨きをかけられていたのではなからうか。」(二六三頁)

あの松山俊太郎氏ですらも、良寛の書のすばらしさだけは認めていたことに、筆者は驚きを禁じ得ない。

久間慧忠(1991)には、

「いや、たとえどんな困難な道でも、古に法のために我が身を忘れ棄て切った兎や童子があつたればこそ、永遠に真実の法が伝わり、残されてゆくのです。中途半端な行動ではとても駄目です。ましてや見せかけの行為など、もちろん許されません。

燃え盛る焚火の中に躍り込み身を投じた兎があつたればこそ、真実、仏法も永遠に不滅です。」(五八頁)

とあり、久間(2010)には
「燃え盛る焚火の中に躍り込み身を投じた兎を翁が差し上げた行為は、恥ずかしながら人間でもとつてい真似はできません。

これは単なる物語ではありません。真実、このようなすばらしい行為があつたればこそ、仏法も永遠に不滅だと

申せましょう。」(二八頁)

とある。「良寛好き」には何でもありなのである。この久間氏などは、わけのわからぬ物言いを無反省的に繰り返して垂れ流しているとしか言いようがないのである。「兎が腹を空かしている旅人の翁に、自分の身を焚火の中に投じて、差し出した」、その兎の行為が素晴らしい！と言いたいのだろうかと思う。良寛の涙は何を意味しているのだろうか。筆者が本稿で問おうとしたのはただそのことだけなのである。きつかけは何であれ、兎が、徹底して自己を捨てたということである。あるいは、兎が立派な布施行を実践したということである。仏教の菩薩道として知られる六波羅蜜の一つ、布施波羅蜜を成し遂げたということであろう。仏教徒として六波羅蜜の重要さを承知していた良寛は、その兎の所業に感心し、感動したというのはよくわかるのである。「兎は凄い、自分には到底出来ないことを見事にやっつけた」と感動したということであろうか。仮にそうだとしても、その涙は、感動の涙というものだろうか。良寛にとつて、「月の兎」の話の中に、天帝の号泣、天帝の涙を描くことにはどのような意味があったのだろうか？

瀬戸内寂聴氏の以下に見られる感想は、素直に受け入れることができるだろうか。

「読みすすむうちに、私は涙がこみあげてとどめることができなかつた。何の能もない兎が、機転のきく動きのす早い猿と狐の手がらの前で、ただおるおると、飛びまわっている姿が**あわれ**でおかしいうちに、燃えさかる炎の中にわが身を投じるいじらしさに胸をつかれ、私の涙はこらえきれずあふれたのだった。兎の犠牲と愛の貴さを、長詩にせずにはいられなかつた良寛さまのおやさしさが、兎のあわれに添えて胸に沁み、涙はいっそうこみあげとまらな

い。」(瀬戸内「69」二五七頁)

「前世でわたくしは良寛さまの娘か、孫であったような気がします。いいえ、もしかしたら可愛がついていただいた兎かも」

「兎………」

良寛さまのお目に光が宿った。

「昨夜、ある人から、月の兎のお歌を見せてもらいました。兎がいじらしくて、泣けてなりません。涙でうるんだ目で見つめたせいか、十三夜の月の中に兎がいつぱいひしめいているように見えて………」

良寛さまのお目にもみるみる涙がにじんできくる。

「月の兎のことを思うと、いつでもあわわで泣けてくる」(瀬戸内二六二六三頁)

岡邊白夜二九二頁所収の「月の兎」も紹介しておきたい。

「むかし印度の國で、二匹の猿と狐と兎とが、何でも人のためになる好い行ひをして、その功德で今度の世にはえら
い人間に生れて來たいものだと思ひ、道側にすわつてその修行をしてゐました。

ところがある日の暮方に一人の旅の坊さんが、随分疲ひれた様子で通りかゝり、

『お腹がすいて堪りませぬ。どうかわたくしに食る物をおめぐみ下さい。』

と願ひました。

猿は自分がたべようと思つて、ただ一つの果物を持つてゐるだけでしたが、惜氣もなくそれを差出して、

『どうぞこれをお上がり下さい。』

と云ひました。が、坊さんは首を掉り、

『いえ、わたくしは果物は食べませぬ。』と云つて、次にゐた狐にむかつて食物をねだりました。狐は自分の食べるのに一匹の魚をもつてゐましたが、

『はい、どうかこれをお上がり下さい。』

と、すぐそれを差出しました。しかし坊さんはやはり頭をふつて、

『いや、私は魚をたべませぬ。』

と云つて通り過ぎ、次にゐた兎の前に来てまた食物をねだりました。

すると兎は急いで、枯枝をあつめて、焚火をしました。そして、

『わたくしは何も差上げるものを持つて居りません。この火で私の身體を焼きますから、どうかそれをお上がり下さ。』

と云ふが早いか、火の中に飛込んでしまひました。すると火は忽ちに白い蓮の花と變つてしまひました。

その坊さんは實は佛さまで、猿と狐と兎の心掛を試して見たのでした。

『あゝ、いぢらしい心の兎よ、お前の姿は何時までも世界の人が仰ぎ見るやうにしてやろう。』

さう佛さまは仰有つて、高く手を伸ばし、折柄上つて來ました月の面おもてに兎の姿をお書きになりました。

今もある月の面の兎の形は、この時に出來たものと印度の人は思つて居ります。」(六四—六五頁)

良寛の長歌「月の兎」の本文解説に關しては、大島花束〔1939〕のテキストに即したものが、岩波書店編集部〔1936〕所収の「二二 月の兎 良寛」と題した詳しい興味深い解説(四五四—四六七頁)がある。詳述を避けるが、良寛の長歌「月の兎」を教材に用いることによつて、果たしてどのような教育効果が見込まれたのだろうか。

もううんざりするほどであるが、せっかくだから安藤秀男〔198〕も見ておこう。

「良寛にとつては、このけなげな兎は、自分のことのように思われた。心ばかりあつて、なんにもできないものは、自分の身体を捧げずするより仕方がない。だから、この兎がかわいそうで仕方がなかった。この話をするとき、良寛のあたまは兎でいっぱい、子供たちがそばにいるのを、忘れてしまうほどであつた。」(安藤〔198〕一八〇—一八二頁)

坪内逍遙の舞踊劇「良寛と子守」については、植田〔198〕が見出しを立てて説明しているのを見逃すことは出来ない。

「この舞踊劇は、昭和四年(一九二九)「中央公論」に発表、同年八月帝国劇場で上演された。守田勘弥の当たり芸となり、以後、尾上菊五郎、坂東三津五郎らによつて受けつがれた。演劇博物館記念式典にも逍遙自身が演出、上演した。晩年最後の作品である。」(一九六頁)

筆者が今注目すべきと考えるのは次の件である。

「やがて懐から手まりを取り出し、手まり歌に合わせてまりつきをはじめ。だが、良寛はまりを落としてしまい、負けた罰に子供たちにお話をする。猿と狐、兎が痩せた旅の老人にそれぞれ木の実をとり、魚をつかまえて食べさせる。兎は何もできないが、火の中に身を投げ、せめてわたしの肉を食べて下さいと死ぬ。この老人は¹⁷となつて、身を殺して他を救ふ、これこそよなき功德ぞ」と兎をつれて、月の宮へ連れていったという長歌である。

子供たちがしんみりするので、気を取り直すように、良寛はまた穂つきをはじめ。今度は子守のおよしが取り落とし、出雲崎の船唄を歌う。」(二九八頁)

川端 [1969] の中で、川端康成は、道元の「春は花夏ほととぎす秋は月／冬雪さえて冷しかりけり」(二二頁)を引いたのちに、良寛の辞世、「形見とて何か残さん春は花／山ほととぎす秋はもみぢ葉」(二三頁)を引き、それに対しては、「現代の日本でもその書と詩歌をはなはだ貴はれてゐる良寛、その人の辞世が、自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思はぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだらう、といふ歌であつたのです。日本古来の心情がこもつてゐるとともに、良寛の宗教の心も聞える歌です。」(二五頁)と説明している。自らの死を、先の兎の死に重ね合わせたなら、川端康成のその説明文が、そのまま、「月の兎」の意味を説明するものとなつてゐる、と言えるかも知れない。そこで大切なのは、兎の自死にいたるまでの心理的葛藤を必要以上に詳細に描き込まないことではないだろうか？ 相馬御風などの手に掛かると、「月の兎」の死の意味がぶれてくる、「月の兎」に対する人々の思いの意味が世俗的に墮してしまふように思われる。人々の「涙」の意味が、感動なのか、憐れみなのか、ということである。どちらでもいい、とにかく「月の兎」は人々の涙を誘うではないか、相馬御風は、その土台の上にとりどりの楼閣を築いたロマンチスト。筆者は、伊丹末雄氏の相馬御風観を概ね支持したい。良寛の紹介にあつて為した御風の功罪をさらに指摘すべきだろうと考

える。

(了)

【略号・参考文献（抄）】

- 安藤英男 [1986] 著 『良寛逸話でつづる生涯』 すぎき出版
- 五十嵐一 [1989] 著 『神秘主義のエクリチュール』 法蔵館
- 池上海一 [1999] 著 『新版今昔物語集の世界―中世のあけぼの』 〈以文叢書2〉 以文社
- [2008] 著 『説話とその周辺』 〈池上海一著作集第四巻〉 和泉書院
- 石田吉貞 [1975] 著 『良寛―その全貌と原像―』 塙書房
- 伊丹末雄 [1974a] 著 『越後と万葉集』 〈ほくえつ選書3〉 北越出版
- [1974b] 著 『良寛―寂寥の人―』 国書刊行会
- [1976] 著 『書人良寛―その書風と生涯―』 国書刊行会
- [1994] 著 『改訂新版良寛―寂寥の人―』 恒文社
- [2000] 著 『万葉の香』 北越出版
- 井本農一・關克己 [1959] 校註 『年代別良寛歌集』 角川文庫
- 岩波書店編集部 [1936] 編 『國語学習指導の研究 巻七』 岩波書店
- 上田重雄 [1998] 著 『坪内逍遙―文人の書』 恒文社
- 内山知也他 [2006・2007] 編 『定本良寛全集』 (全三巻) 中央公論新社
- 相賀徹夫 [1983] 編 『小林古径・安田靫彦』 〈現代日本絵巻全集8〉 小学館
- 大久保道舟 [1969・70] 編 『道元禪師全集』 上・下巻 筑摩書房
- 大島花束 [1929/1958] 編 『良寛全集』 良寛全集刊行会／新元社

- [1933]校註『校註 良寛歌集』岩波書店
- 岡正雄 [1971]編『月と不死』(N・ネフスキー著)平凡社
- 岡邊白夜 [1926]訳著『おもしろいおとぎばなし2 磐の王子』宏文堂
- 加治フミ [1995]〈良寛に魅せられた人々〉良寛敬慕と不滅の業績 関克己『良寛』第27号
- 加藤億一 [1975]著『良寛記念館』考古堂書店
- [1976]著『良寛の旅』(ノジマ・ブックス1)野島出版
- [1977]著『良寛記念館』(ノジマ・ブックス5)野島出版
- [1979a]著『良寛と相馬御風』(考古堂ブックス①)考古堂書店
- [1979b]著『良寛の書と風土』(考古堂ブックス②)考古堂書店
- 金沢篤 [2016]『伊丹末雄と堀口大學―或る有らざらん格言をめぐる本の旅―』駒澤大学仏教学部論集』第47号
- 亀井勝一郎 [1940]著『捨身施虎』筑摩書房
- 川端康成 [1969]著『美しい日本の私』講談社現代新書
- 喜多上 [1998]『良寛文献案内』『國文學』六月号
- 北川省一 [1983]著『漂泊の人良寛』(朝日選書233)朝日新聞社
- 城戸玉雄 [1936]『巴漢對檢佛教學讀本(第二回) 兎と仙人の話』『ピタカ』第四年第十一號
- 久間慧忠 [1991]著『良寛入門 三千大千世界の仏法』象山社
- [1996]『良寛さまと仏法(七)―月に想う』『良寛』第30号
- [2010]著『良寛の涙』法蔵館

- 国東文磨 [1981] 訳注『今昔物語 (五) 全訳注』講談社学術文庫
- 紅野敏郎・相馬文字 [1982] 編『相馬御風の人と文学』名著刊行会
- 小島正芳 [1987] 著『良寛の書の世界』恒文社
- [1998] 『良寛の書と漱石・八二』『國文學』六月号
- 子田重次 [1995] 〈良寛に魅せられた人々〉良寛帰依の人相馬御風』『良寛』第27号
- 小林新一・宮栄 [1968] 著『良寛のふるさと』中日新聞東京本社東京新聞出版局
- 小松正衛 [1985] 著『良寛さま』〈カラーブックス 691〉保育社
- 酒井明 [1982] 編『良寛その生涯と芸術』〈別冊墨第1号〉芸術新聞社
- 篠原昭二 [1980] 『今昔物語集』鑑賞日本の古典 8 今昔物語集・梁塵秘抄・閑吟集』尚学図書
- 白石良夫 [1998] 『良寛と長歌』『國文學』六月号
- 杉本重雄 [1939] 著『良寛の生涯』金鈴社
- 關克巳 [1951] 『良寛研究文献目録』『國文學 解釋と鑑賞』三月号
- [1956] 著『良寛』〈アテネ文庫 281〉弘文堂
- 瀬戸内寂聴 [1991] 著『手鞠』新潮社
- 禅文化研究所 (花園大学) [1998] 編著『良寛和尚逸話選』禅文化研究所 (花園大学)
- 相馬御風 [1916] 著『還元録』春陽堂 ↓ 相馬 [1935b]
- [1918/1924] 著『大愚良寛』春陽堂
- [1919] 著『良寛和尚遺墨集』春陽堂

- [1925//1951] 著『一茶と良寛と芭蕉』創元文庫
- [1928] 著『良寛坊物語』春秋社
- [1930a] 著『貞心と千代と蓮月』春秋社
- [1930b] 著『良寛さま』実業之日本社
- [1935a] 著『良寛百考』厚生閣
- [1935b] 著『御風隨筆』春陽堂文庫
- [1935c//1945] 著『續良寛さま』実業之日本社
- [1936] 著『獨坐旅心 相馬御風隨筆全集第六卷』厚生閣
- [1939] 著『良寛物語』春秋社
- [1941//1974] 著『良寛を語る』有峰書店
- [1947] 「尾崎紅葉の見た良寛和尚」『野を歩む者』第81・82合併号↓相馬[1984]
- [1951] 著『良寛』〈光を掲げた人々3〉共和出版社
- [1984] 著『相馬御風隨想―良寛を中心として―』三樹書房
- 相馬御風生誕百年記念事業実行委員会[1982]編『相馬御風―その生涯と作品―』考古堂書店
- 相馬文子[1995]著『若き日の相馬御風―文学への萌芽』三月書房
- 高島米峰[1917]『良寛上人』『熱罵冷評』丙午出版社
- 田熊信之[1998]〈評釈〉良寛の詩29篇『國文學 良寛―仏教と歌と詩と』六月号
- 竹下數馬[1955]『良寛の信仰』『國文學 解釋と鑑賞』三月号

- 竹田道太郎 [1988] 著 『安田鞞彦―清新な美を求め続けた日本画家―』中央公論美術出版
- 谷川敏朗 [1982] 「良寛研究小史 その生涯と芸術は近代以降どのように研究評価されてきたか」 ↓ 酒井明 [1982]
[1996a] 著 『良寛詩歌と書の世界』二玄社
- [1996b] 著 『校注良寛全歌集』春秋社
- 玉木哲 [1991] 編著 『良寛の里美術館』考古堂書店
- 中央公論美術出版 [1974] 編刊 『良寛自筆歌集 布留散東・久賀美』中央公論美術出版
- [1979] 編刊 『安田鞞彦の書』中央公論美術出版
- 辻直四郎・渡辺照宏 [1956] 訳 『ジャータカ物語』岩波少年文庫
- 辻美佐夫 [2005] 「坪内逍遙作舞踊劇「良寛と子守」考」『良寛』第48号
- 津田青楓 [1935] 著 『良寛隨筆』南有書院
- 角田泰隆 [2015] 著 『道元禪師の思想的研究』春秋社
- 坪内逍遙 [1950] 「良寛と子守（舞踊劇）」『日本名作戯曲全集第一卷 坪内逍遙集』北條書店
- 東郷豊治 [1953/1980] 著 『良寛歌集』創元社
- [1957] 著 『良寛』創元新社
- [1959] 編著 『良寛全集』（上・下）東京創元社
- 中村宗一 [1984] 著 『良寛の偈と正法眼蔵』誠信書房
- 中村元 [1988] 監修・補註 『ジャータカ全集4』（松村恒・松田慎也訳）春秋社
- 新関公子 [2016] 著 『根源芸術家 良寛』春秋社

- 西郡久吾 [1974] 編述 『北越偉人沙門良寛全傳』 日黒書店
- 西野妙子 [1981] 著 『良寛・その心性―茫々かつ独りゆく』 国文社
- 根津美術館 [1973] 編 『良寛遺墨集』 根津美術館
- 長谷川耕南 [1955] 『良寛の書について』 『國文學解釋と鑑賞』 三月号
- 長谷川四郎・小島正芳 [1988] 監修 『良寛生誕三三〇年記念人間良寛・その生涯と芸術』 朝日新聞名古屋本社企画部
- 長谷川洋三 [1974] 著 『良寛の思想と精神風土』 早稲田大学出版部
- 林謙三 [1990] 著 『人間良寛 日本のお釈迦さま』 考古堂
- 坂東三津五郎 [1975] 『私の好きな書』 『豪華普及版』 書道藝術第20卷附録 月報2』
- 干潟龍祥・高原信一 [1990] 訳 『シャータカ・マラー』 講談社
- BSN 新潟美術館 [1967] 編 『良寛の書簡』 BSN 新潟放送
- BSN 新潟美術館・毎日新聞社 [1980] 編 『没後百五十年 良寛展図録』 毎日新聞社
- 深浦正文 [1952] 著 『新稿 佛教文學物語』 上・下巻 永田文昌堂
- 平塚市美術館 [2002] 編 『開館10周年 日本画の巨匠 安田靉彦―歴史画の魅力―展図録』 平塚市美術館
- 堀口すみれ子 [1987] 著 『虹の館―父・堀口大学の想い出―』 かまくら春秋社
- 堀口大学 [1949] 『良寛遺珠』 『文學界』 第一卷第2号→『日本学』 編集室 [1988] 全集7
- [1957] 『良寛和讃』 『新潟日報』 8月8日号 ↓堀口大学全集7
- 松本市壽 [1988] 著 『野の良寛―『良寛禪師奇話』を読む』 未來社
- 松本和男 [1969] 編 『堀口大學詩集 飛花落葉抄』 白鳳社

- 松山俊太郎 [1991] 「謎の男・良寛」『季刊墨スペンシャル』第6号
 [2016] 著『松山俊太郎・蓮の宇宙』（安藤礼二編・解説）太田出版
- 萬羽啓吾 [2007] 著『良寛―文人の書―』新典社
- 水沢澄夫 [1974] 編著『安田靉彦』〈日本の名画25〉講談社
- 水谷真成 [1971] 訳『大唐西域記』〈中国古典文学大系22〉平凡社
- 皆川喜代弘 [2000] 編著『良寛に魅せられた文人・画人』考古堂
- 宮榮一 [1985] 編著『良寛研究論集』象山社
 [1988] 著『良寛その生涯と書』名著刊行会
- 宮格一他 [1980] 著『良寛の世界―没後二五〇年記念論集』大修館書店
- 武者小路実篤 [1968] 「良寛」↓安田 [1968]
- 森脇正之 [1973] 編著『良寛と玉島』〈倉敷叢書4〉倉敷市文化連盟
- 矢代静一 [1993] 著『良寛異聞』河出書房新社
- 安田建一 [1985] 編『良寛の書―安田靉彦の愛蔵品による―』中央公論美術出版
- 安田靉彦 [1968] 監修『限定特装版良寛』筑摩書房
- 山田孝雄他 [1959] 校注『今昔物語集一』〈日本古典文学大系22〉岩波書店
- 山本和夫 [1958] 著『ものがたり良寛さま』偕成社
- 横山英 [2007] 著『校本良寛歌集』考古堂
- 吉田絃二郎 [1965] 著『良寛』〈世界伝記全集4〉ポプラ社

吉野秀雄 [1952/1955] 著 『良寛歌集』〈日本古典全書〉朝日新聞社

[1965] 「解説」良寛和尚の一生」→吉田 [1965]

[1966] 著 『やわらかな心』講談社

[1967] 著 『心のふるさと』筑摩書房

[1972] 著 『良寛和尚の人と歌』〈彌生選書18〉彌生書房

[1975] 著 『良寛―歌と生涯―』〈筑摩叢書216〉筑摩書房

[1975/2001] 著 『良寛』アートデイズ

吉本隆明 [1989] 著 『信の構造』春秋社

[1992] 著 『良寛』春秋社

渡辺秀英 [1974/1977] 著 『良寛詩集』木耳社

[1979] 著 『良寛歌集』木耳社

【註記】

(1) 「良寛禪師奇話52」(東郷 [1959] 下五三三頁)

(2) 中野孝次氏は、「解良家には良寛の書や、巻物になった手紙など数多く残されている中に、良寛が鍋蓋に書いた「心月輪」の書は、名品中の名品であった。」(中野 [2000] 三八頁) と言う。同書三七頁には、「解良家の床の間に飾られた良寛の書と鍋蓋「心月輪」の写真が掲載されている。いかにも由緒止しき「良寛の名品」のように見える。また、栗田勇氏は、「この作品は紙ではなく、木の板に一旦良寛が書いた文字を、後の人が彫ってそこに胡粉を埋めたものである。また、なべぶたであ

るから、直径約四十七センチの丸い円である。この中に、踊るような字で、「心」と「月」と「輪」という三文字が書かれていて、たんに書がすばらしいというだけでなく、そのまま、最も新鮮なデザインで、まさに良寛の心が象徴されたもののように感じられ、私の心をとらえて離さなかった。」(栗田 [1985] 二五九頁) 加藤 [1979b] には、「ナベブタに書かれた書として有名な作品。厳密には鍋敷きのものであるが、やはりナベブタの方が風流でよい。」(二〇六頁) とし、次いで「心月輪」は真言宗の中心的思想である月輪観のことで、特に両界曼荼羅のうち、金剛界を心月輪という。丸いナベブタを見た良寛が、咄嗟に月輪を連想したのであろう。／書は「心」の点を高く打ち、「輪」の旁を下げるなど「心月輪」三字がしつくりと調和し、見事というほかはなご。」(二〇六頁) と記している。

- (3) 堀口すみれ子 [1987] には「良寛さま」との章の中で、「良寛さま／＼心はまどか／＼月の輪と／＼姿は淡し／＼けむりかと」(四二頁)と引かれ、「父はいつの頃から良寛にひかれていったのでしょうか。終戦後二十一年秋から足かけ四年ほどの高田(今の上越市)ぐらしの間に、良寛の人や書に傾倒していったのだと思います。四年の間に良寛研究家の東郷豊治さんと、あちらの家、こちらの寺と良寛の書を秘蔵している人を何度も訪ね歩いていることが父の日記から知ることができます。」(四二頁)と記されている。後出伊丹氏が指摘するように、堀口大學は良寛その人についてほとんど語っていないが、その意味でも、全集7収録の堀口 [1949] や堀口 [1957] は、堀口大學の良寛観を窺う上で貴重なものであろう。

- (4) 良寛の生涯と思想を中心に論じた伊丹 [1974] ◇ 伊丹 [1994] と良寛の書について論じた伊丹 [1976] の二冊(改訂版をいれると三冊)。

- (5) 伊丹末雄氏と堀口大學に関してはその関係を中心に論じた金沢 [2016] 参照のこと。

- (6) 「先生ははなはだ、かかりやすい体質をもって発病、重態におちいられた由緒正しい良寛病患者で、仮病をつかう、いかげんな野次馬連中と類を異にされている。」(伊丹 [2000] 二〇二頁)

(7) このように堀口大學の良寛への思いを言葉にしてみると、なぜか、サンスクリット語などを教わった原實先生がお好きな『史記』『老子伝』の箴言「良賈は深く蔵して虚しきが如し」を想起する。

(8) 「書家の書」を嫌ったという良寛に対して用いられた「書人」、それを書名に掲げた伊丹〔1976〕を筆者は忘れられない。

(9) 伊丹氏の二冊の良寛論はまことに示唆的な優れたものと考えるが、その没後、伊丹氏の精神は、おそらく晩年の伊丹氏の側にあつて親しく薫陶を受けたのであろうと想像される萬羽啓吾氏にしっかりと受け継がれているように思われる。本文中にも触れることがあろうかと思われる萬羽氏の良寛観は、良寛を「文人」と捉えるところに明瞭となる。文人とは、自分の作品(主として書に具体化する)に徹底して拘る芸術家の謂いである。萬羽〔2007〕の副題「文人の書」に注目すべきであろう。筆者は、例えば萬羽氏の「近年になつて年紀のない良寛の遺墨の制作年代が、他の歴史的事象等によつて推測され明らかになつてきています。そして良寛の書に限らず晩年の書、いわゆる枯れた書」に対してやみくもに高く評価する風潮があります。しかしながらその「枯れば老衰」というあまりにも大きな代償と引き換えのものである以上、もっと慎重に鑑賞・評価されるべきです。特に良寛の場合、老衰してもなお口が求めるものに対して迷ひ続けた末の書であることを前提に考える必要があると思ひます。迷ひ続けた人、良寛。ただし迷つた数だけ道理を悟つたはずで、覚悟の違いが格の違いという気がします。」(萬羽〔2007〕二〇〇頁)を読むと、伊丹氏の思ひが、確実に萬羽氏の中に伝わっていると感ずる。金沢〔2016〕四一五―四二六頁参照。

(10) 筆者が本放執筆に際して参照し得た書物の中で、良寛の長歌「月の兔」に言及しているものには、参考までに、末尾の【略号・参考文献】中に(◎頁数)を付すつもりでいたが、紙面が繁雑になることをおそれて断念した。良寛の長歌「月の兔」について言及しているものは、意外にもさほど多くない。

(11) 相馬〔1928〕。

(12) 相馬 [1930b]。

(13) 坂東三津五郎氏に「書道なんてむずかしいものは私たちに分るわけはないのですが、二十四歳の時、故坪内逍遙先生から呼びつけられて、先生の作品舞踊劇「良寛と子守」の振付けをしると言いつけられました。どこで上演するのですか、と伺ったら、私一人に見せればいい、一年掛りで作れとのことでした。たいへん感激いたしました。良寛さまのことなら、大磯の安田鞆彦先生の所へと早速伺いまして、それから良寛さまの勉強にとりかかりまして、いろいろ本も読ませていただいたり、良寛さまの書も見せていただきました。」(坂東 [1975] 四頁) とある。

(14) 良寛の数ある遺墨に対するこうした理解は、一人谷川敏明氏に限らない。既に「常識」となっているものだと思う。例えば最新の研究の一つと言い得る新関 [2016] には「晩年には多くの仏教的遺墨が残された。なかでも仏教説話に取材した、哀切極まりない自己犠牲の物語「月の兔」を何度も書いて人々に与えたことは、言葉による衆生済度の意欲の顕著な表現と見ることが出来る。『定本・二』には遺墨から三種、写本から二種、合計五種の「月の兔」が収録されている。決定稿があるわけではなく、脳裡に刻んだ文を、請われるままにその都度記憶によって書くので、どの作も大意は共通するが、細部の表現が微妙に違う。」(四八九頁) とある。

(15) この反歌を、谷川氏は、「六一一 あたら身を 翁が贅と なしけりな 今の現に 聞くがともしさ」(谷川 [1961] 一七九頁) と収録し、「六一一 もつたいない身体を、うさぎは老人の食べ物として捧げたことよ。今現在、その話を聞いて、ひどく心ひかれることだ。」(一七八頁) と頭注に現代語訳を付している。この反歌よりするに、良寛は、捨身した兔に対して、「そつまですることはないのに、追詰められていたのだから、不憫なことである。」と同情しているように見える。だが、その一方で、「六一三 まず鏡 磨ぎし心は 語り継ぎ 言ひ継ぎしのべ 万代までに」という別の反歌を見るに、谷川氏の頭注の「六一三 よく澄んで曇りのない鏡を磨いたように、きよらかなうさぎの心の人々よ、語りつぎ、言いついで、いつの代

までも、思いいしのでほしいものだ。」(二七九頁)を見るまでもなく、良寛がその鬼の心を、「きよらかなうさぎの心」と捉えて評価し、それに感動したらしく思われるのである。

(16) 鬼の前にたちはだかるのが、神(天帝・神々の長)帝釈天)であることを、忘れがちである。腹を空かした翁の正体が、インドラ神であり、その化身の目的と、鬼の捨身に果たしたインドラ神の役割こそが、様々な意味で、この物語の種々「涙」の意味を説き明かす上で重要な役割を果たしていることに気づかない者がなんと多いことか。ジャータカ三二六にあつては、鬼を實際の死に至らしめることはないのである。本牧でも様々に見る如く、翁の正体を「仏」と解する者までいる。また「月の世界」を浄土と同視する者までいるのである。食物をもたらし得ない鬼に対して、仲良しの猿と狐に加えて威神力の持ち主であるインドラ神までもが、鬼を語り非難する一節は果たして必要だったのか。そして、鬼を本当の死に至らしめる必要があつたのか。良寛の長歌「月の鬼」の特異性は、そのあたりに求められることを繰り返し指摘しておきたい。

(17) 作曲家大中恩氏の女声合唱組曲「月と良寛」(一九六〇年 宮地廓慧作詩)が《大中恩合唱曲集》(キングレコード SKD-7023)に収録されていて興味深い。その第三曲が良寛の人間臭い長歌を踏まえた「月のうさぎ」であるが、僧侶でもある宮地氏は、それを見事な仏教詩にリメイクしている。

(18) 伊丹[1994]に、「関氏の研究は、良寛の和歌に関してのものが大部分を占め、さっぱり書物にまとめられておりません。『良寛歌集』(井元農二共編)という題の文庫本(角川文庫)がこの人の、良寛だけを扱った、ただ一冊の著書ではないでしょうか。／＼しかし、関氏の研究はなかなか手がないものでありまして、今でも存在価値を失っていません。私は若いころ、雑誌を捜しては読ませてもらいましたが、そのつど敬服せずにいられませんでした。」(二五六頁)とある。筆者も關[1955]を読んで、例えば喜多[1998]の粗雑さと比較しただけでも、伊丹末雄氏と同じ印象を持った。